

僕は帰りが遅い。荷物の準備が遅いとか教室で勉強をしていたとか、明日の朝を気持ちよく迎えるために掃除をしていたとかいう訳ではない。まして頭の出来が悪くて毎日居残っていたということでもない。ただぼーっとしていて、気づいたら教室に一人取り残されていた。

学生というのはやたら早く帰りがるものだ。いかに早く教室を出て、いかに早く昇降口を抜けられるかをこぞって競う。特に用があるわけではないけれど、鬼気迫る勢いで帰宅戦争に参加している彼らはたぶんあつてる。毎日遅くまで教室に残っている僕が間違ってる、とも思わないけれど。模範的な学生ってそういう人なのだろうな、なんて漠然と思うだけだ。

この答えにとづくにたどり着いていてなお、帰宅戦争の惨敗を決め込んでいた僕は今、なんと誰よりも早く教室を出るようになった。それには理由があるのだ。至極単純、安直な理由が。

教室を出ると夢の国が広がっている。厳密にいうなら、教室を出て階段を下り、学校の最下層のそのまた下層に下りていくと。

最下層より下層はないと思うだろう。それは確かに正しいのだ。だがしかし、それは一般的な、「あたりまえ」において正しいだけで、僕が体験している現実の前では意味をなさない。このように表現するほかないようなことが起こっているからだ。「あたりまえ」が通用しないのが「あたりまえ」なのかもしれない。足をいそいそと動かし、まだ誰一人の気配もない廊下を渡る。階段を一つ飛ばしで下りて四つの踊り場をこえた。

そこにあるのは何の変哲もない階段。

少し古ぼけていて剥げかけの床ワックスを纏っている、これまで下ってきたものと変わらない階段だけど、もともとこの空間に存在していないはずのものが現れたのだからその希少さはかなりのものだろう。例えるなら魔法学校を舞台にした某ファンタジー小説に登場する「秘密の部屋」みたいなものだろうか。存在自体が夢のようなものだ。

そんなことを考えていたほんの短い時間で目的の場所に到着していた。

東京ドームに行ったことはない僕だが、それよりも大きいと確信できるほどの広大な敷地。そこへ等間隔に並び立つ本棚。その一つ一つには丁寧にディスプレイされた本や雑誌、それ以外にもCDやDVDが並べられている。

僕にとって夢の国とは図書館である。

「あら、山野くんこんにちは。」

入ってすぐのカウンターから、若い女の人が顔を出す。肩ぐらいまである髪を一つに束ね、菜の花色のエプロンを身に着けている。

「こんにちは、竹内さん。」

素敵な笑顔を返してくれた彼女の名前は竹内陽菜さん。年齢はおそらく二代前半くらい。この図書館の司書で、僕がこの場所にきて初めてあった人である。ちなみに山野とは僕の名前だ。やまのたかし、山脈の山に野原の野、たかしは親孝行の孝。

「今日も早いね。」

数冊の本を抱えた竹内さんがカウンターから出て話しかけてくる。

「ええ、放課後直で来てるので。手伝いますよ。」

僕はそこから数冊をとって言った。

「ありがと。そういえば、山野くんは学校の階段からだ。」

「そうなんです。」

竹内さんはうんうんと頷いた。

どうやら、ここへは人それぞれ異なるルートを通ってやってきているようだった。僕は学校の階段、ある人は会社のエレベーターで、またある人はふとした時、意図せず迷い込むといていた。共通点は本来あるはずのない道を使っている、そしてその道は地下につながっているとどこくらいか。

僕はすっかりこの図書館の常連になっている。ほぼ毎日この図書館に通い、最近竹内さんの手伝いもしている。おかげでカウンターでの貸出や返却の手続きをしたり、データを管理したりという仕事は一人でできるようになった。

司書の免許ないといけないのでは、と竹内さんに訊いたことがあるが、彼女は片目をつぶって「ここは特別なのよ。」と言った。

しかし、僕には絶対にできない仕事もある。

この図書館の不思議なところで、来るたびに本の配置が変わる。同じ棚に一度として同じ本が入っていたことはなく、どういう規則で本が移動しているのか全く分からない。普通の図書館で起用されている日本十進分類法というのも、この図書館では完全に無視されているようである。ジャンルも作者も大きさも、バラバラに並べられているのだ。並べ方も特殊できれいに並ぶ棚もあれば、ポツリと一冊置かれているときもある。

「また、配置替えしたんですか。」

返却された本を棚に戻すのを手伝いながら、質問をする。一冊一冊竹内さんが、「それはここ、あれはそっち。」という具合に指示を出してくれるから、僕はそれに従うだけ。中には見たことのあるものもあったが、やはり戻す場所は元あった場所とは異なるようだった。

「変わってる？」

彼女は首を傾げた。

「毎回変わってますよ。これ、竹内さんが動かしているんじゃないんですか。」
僕はいぶかしく思いながらも再度質問を試みる。すると竹内さんは手にした数冊の本を眺め「なるほどね。」と言って笑った。

彼女は作業する手を止めて僕に向き直り、語りだした。

「山野くんが見ている景色が全てだよ。君にとつての世界が詰まっているのがこの場所なの。」

「どういうことですか？」

まったく意味を理解できなかった。

竹内さんは相変わらず笑顔を崩す事なく、手にしていた本を棚に置いて歩きだした。菜の花色のエプロンをひらひらさせて、迷路のように連なる本棚の間を先へ先へと進んでいく。同じ建物の中にいるはずなのに、はたらく黄色を追っていると、不思議の国に迷い込んだ気分だった。僕がアリスで竹内さんが白ウサギ。導かれるまま進み続けることに一抹の不安を感じ、せめて目的だけでも聞いておこうと口を開いた。しかし、開きかけた口が言葉を発することはなかった。

「どうかな？」

ピタリと立ち止まり、示した先には一つの本棚。

飴色で、おそらくパイン材で作られているのだろうか。優しい木目と手触りが印象的だ。全体的に明るい印象を受ける。

入っている本はこれまた多彩なジャンルで、けれど僕が目にしたことのないような本が多くの場所を占めていた。特に絵本が多く、今までこの図書館では片手に数えるほどのものしか見たことがなかったので少し驚いた。

「こんな棚もあったんだ。初めて見ました。」

僕は何か月もこの場所に来ている。だから、大体のことは知っているつもりだった。しかし、僕の記憶には木材で出来た本棚はなかったと思う。鉄やプラスチック、ガラス製なんて珍しいものも見たことがあったけど。

「そうでしょう。ここはね、私の世界なのよ。」

誇らしげに竹内さんが言った。

「この図書館はね、訪れる人の心を映すんだよ。そして、目に入る景色は人それぞれ違う。持つてる世界が違うから。本の位置も変化するし、通ることが出来るルートだって変わる。今は私が通りたいと思った道を案内しているから、必然的に山野くんも私を反映した世界を見ることになるの。」

それは不思議な話である。まるで、図書館が意志を持っているかのような言い方だ。

「……そうなんです。いや、よくわかんないですけど。」

少々の沈黙の後に返事を絞り出した。肯定したものの彼女の話を一ミリも理解できていなかったため、大急ぎで否定を述べる。

「ふふっ。そりやそうだ、あまりに突飛だもの。」

「ですよね。」

「そう。でも、ここはそういう場所なんだよ。」

竹内さんは言った。

「ほら、こっちも見てみて。」

手を引かれて行く先にはずらりと並んだ温かみのある木調。先ほどと同じように本棚に詰まった本は馴染みのないものばかりだった。

「それ、おもしろいよ。恋愛小説。」

紺地にパステルカラーの光が散る文庫本をまじまじと見つめる。装丁に惹かれて手に取ったこれは初めて見る恋愛小説ということになる。恋愛というのに興味を持ったことがないから、恋愛小説が僕の世界に現れる確率はゼロだ。僕は悲しくも納得した。

「竹内さん、これ借りてもいいですか。」

折角出会ったんだから、読んでみたいと思った。僕はその一冊と、目に付いた数冊を選んで両手に抱いた。

「もちろん。」

竹内さんはニコツと笑みを深めた。

時刻はすでに二十時を回っていて、外はもう暗かった。肩にかけてカバンの重みを感じながらも泥のように家路を進む。僕は一番に教室を出るが帰りはもともと遅いので、帰宅戦争の覇者になることはない。

結局三冊の本を借りた。どれも直感で選んだから、内容はまだ知らない。僕は未知の読み物に対して少々の期待を抱いていた。

本を読むこと自体が、異なる世界に触れることだと思っていた。冒険も謎解きも、恋愛だって、自分の想像の範疇から逸脱した物語が小さな紙の束に詰め込まれている。本を読めば、自分から抜け出すことができる。僕ではない誰かになって僕が知り得ない事を経験できる。著者の意思に触れ、人を読み解いていって、感情を動かされる。

しかし、今日の不思議な体験のおかげでそれだけがすべてではないと知った。読書のはじまりは本を選ぶことである。興味のあるジャンル、好きな作者や美しい装丁。好きなデザイナーが表紙を担当しているからという理由もあるかもしれない。それぞれの理由で読者は体験する世界を選択していくのだ。

ならば、それが未知の世界だと言えるだろうか。あくまで自らの感性で選んだものだ。自身の境遇と過去と未来と、そういうのを混ぜこぜにした自分という存

在の範疇。それが嫌なわけではないが、選り取れるのは自分の世界の延長線。

今日、竹内さんに案内された図書館は今まで僕が見てきたものではなかった。明るくて、優しさを感じた。アンティーク調の本棚は落ち着きを感じさせたし、地下にある建物のはずなのに日の光が射しているかのようだった。

あれが竹内さんの心なら、彼女はどれだけ美しいんだろうか。憧れてしまう、いや、嫉妬してしまうほどだ。

悲しきかな。僕にはあんな世界は選り取れない。美しく生きることなどできない人間なのだ、僕は。

無機質な素材の、すつからかんの棚。あの大きな図書館の小さな世界が僕の心を表しているとするなら、僕は自分自身に絶望するほかないだろう。

僕が他の学友と共に昇降口へ駆けていくことのできる人間だったら、他者との生活に適応して人の心を理解することのできる人間だったら、こんな虚しさを感じずに済んだのだろうか。いくら心を巡らせても自分と他人の間に隔たりを作ってしまう僕が、もしもみんなと同じように生きることができたら。きっと、もっと美しい景色を見ることができたのだろう。

細い道に立つ独つの灯りが揺れた。道際に並ぶ木々の影がぐらりとなびく。空を見上げれば、真白い三日月が煌々と輝き、星の灯りをかき消していた。かろうじて地上にその光を届けた、たった一つの星の輝きも仄かに霞んで見えた。

翌日の放課後も僕はまた図書館を訪れた。昨日借りた本は夜のうちに読み切ることができたが、おかげで授業中は居眠りをしてしまった。でも、夜更かしをしていなくても居眠りはしてしまうから仕方がない。とにかく借りた本はとも面白かったのでよしとせねば。

耐え切れずに本棚の隅で大きく欠伸をする。

「眠そうだね。」

うん、すごく眠い。一日中眠っていたいくらいだ。

「やっぱちゃんと寝ないとなあ。」

「そうだよ、若いうちはちゃんと睡眠をとらないと。おじさんになったら逆に眠れなくなっちゃうしね。」

「ですよね……え？」

やっと気づいた。僕はいったい誰と会話しているんだ。ふらふら中を漂わせていた視界を引き戻すと、そこには見慣れた作業着姿の男の人が静かに立っていた。

「こんにちは、孝君。」

「……お久しぶりです、メダカさん。」

手に数冊の本を持ち、朗らかな笑顔を向けてくる男性。彼の持つ表紙には決ま

つて一つの魚が描かれているのだ。

「メダカたちは元気ですか？」

質問してみると、彼はとても嬉しそうに語りだした。

「ああ、相変わらず元気だよ。そういえば前話した。ヘアの水槽でね、とっても珍しい色の子が生まれたんだ。今度写真を見せてもいいかな。すごく綺麗なんだ。」
一つ質問をすれば、たくさんの情報を返してくれる。それはすべてメダカについてのことであり、大の大人が嬉しそうに話す姿は僕に少しの安心感を与える。生粋のメダカマニアであり、メダカの飼育を職業にしている人。

これが彼の呼び名、メダカさんの由来である。

僕はメダカさんに会ったとき、必ず「メダカは元気ですか」と聞く。彼自身に元気かと聞くより、こう聞く方がメダカさんは元気になるからだ。

それにしても、今日彼に会うことができたのは運がよかった。

「あの、メダカさん。お願いがあるんですけど。」

「なんだい？」

「この図書館を案内してもらえませんか。」

彼は少し考えた後、ぽんと手を合わせて言った。

「ああ、僕の世界みたい？ いいよ、よろこんで。」

なんだ。メダカさんも知っていたのか。彼はメダカの話をする時くらいうれしそうな様子である。

「さあ行こうか。」

本を小脇に抱えたまま歩き出した。

早速見えてきた景色に僕は思わず笑みをこぼした。

「やっぱりメダカづくしですね。」

並んでいるのは見事にメダカ関連の書籍。ここまで一貫性があると尊敬してしまう。

「あはは。だろう？ 見られると少し照れちゃうな。」

にやにやと笑って頭をかいた。

「なんでそんなにメダカが好きなんですか？」

「あれ、孝くんには話していません。」

「ええ、そうですね……。まだ聞いたことなかったです。」

「そっかそっか」と言っただけしかし教える気配はなくメダカさんは歩いていく。この図書館にいる人はどうも自由な気質の人が多いのではないかと思った。

「教えてくれないんですか？」

「いや、その前にあれ見せたほうがいいと思ってね。」

「あれ？」

「うん、僕の宝箱。これだよ。」

そこにあっただのはカラーボックス大の焦げ茶色の木箱。

メダカさんは静かにそのふたを開いた。

「うわあ！」

僕は思わず叫んだ。開かれた木箱の中には水が張っていて、色とりどりの光彩が瞳に映る。涼やかな青、深い瑠璃、きらきらと混じる黄金色の光が太陽を想起させる。水の流れは緩やかにうねり、まるで小さな海のようなだった。

「すごいだろ？ ほら、でできたぞ。」

促されるままに水中を覗き込んだ。そこに見えたのは小さな魚の群れ。白と朱と、黒と青と。ちょこちょこと水面に向かって進んでくるメダカたちはとても愛らしかった。

「すごく綺麗だ。」

「そうだろう？」

メダカさんは瞳を輝かせて木箱を見つめ、言った。僕は頬が緩むのを感じる。こんなものもあるのか。

見つめるほど、深い青に吸い込まれる感覚を覚える。

瞳は水中に縫い付けられたまま、もくもくと浮かび上がった感嘆交じりの疑問を口にする。

「これが宝箱、ですか。こんなものがあるんですね。」

「僕が、確か高校を卒業したくらいで見つけたやつだよ。ちなみにあと三つあるんだ。」

なんだって、そんなにあるのか。すごいな。

僕が感心して唸っていると、メダカさんが言った。

「孝くんも探してみたら？ 探せば見つかるよ、きっと。」

そういわれたら探さない手はない。僕は図書館内を歩き回っていた。

探して見つかるものなのかと疑ったが、見つけれれば運がいいという程度の気持ちで探すことにした。

しばらく歩き続け、かなり奥のほうまで棚と棚の間を辿り続ける。

時刻も遅くなりおなかも空いてきたが、たった一つすら見つけることはできなかった。これほど探しても見つからないのなら今日は諦めるかため息をついた。

一瞬視界の端に映った光に気づけなかったのだ。

「なあ、山野。お前放課後はすぐにいなくなるけど、一体どこに行ってるんだ？」

六限目が終わりに近づき、最も苦手な数学の時間であるにもかかわらず起きていられたことに達成感を感じながら解ききれそうもない応用問題に取り組ん

でいると、後ろの席の高橋が声をかけてきた。

「どこって図書館だよ。前にも言ったと思うけど。」

そう答えると高橋は訝しげな顔をして言った。

「そういうからこの間中央の図書館に行ったとき、山野を探したんだが見つからなかった。こちら辺にあるといえればあそこしかないし、山野の家はそんなに遠くもなかったろう。」

何と答えればいいのかのさ。確かに図書館に行っているけどあそこは少々、いや、かなり特別な場所なのだ。説明したところでバカにされてしまうのがオチだろう。

「たまたま会えなかっただけだろう。あそこもそこそこ広いからな。」

そんなものか、とやはり納得はしていない高橋だったが、

「たまにはそんな真面目なところに行かないでゲーセンでも行こうぜ。丁度今日行こうと思っていたんだ。」

誘いを受けたが、僕はあのガチャガチャと音が飽和していて電子機器から発される液晶の光で満ちたあの場所はあまり好きじゃないのだ。それに正直ゲームをして遊ぶのが楽しいとも思えない。

「誘いは嬉しいけど遠慮するよ。ごめん。」

そう言って誘いを断った。

しかし、

「なんだ、つれないな。やっぱり変わったやつだな山野は。」

そう言って高橋は笑った。

なるほど、そんなもんか。へえ、そうなのか。

「……やっぱり行きたい。一緒に行こうぜ。」

チャイムが鳴り、ガラガラと音を立て一斉に立ち上がる。礼をして頭を上げると、高橋はにやりと口角を上げて言った。

「そう来なくちゃ。」

変な奴といわれるのは癪だった。だから、「行く」と言ってしまった。それでも放課後、あの図書館に行けないのは惜しいと思った。

高橋と喋りながら学校の階段を下りて行ったが、一回まで降りてもあの図書館へ続く道は現れなかった。僕があそこに行くには一人でなくてはいけないようだ。

アンニュイな気持ちになっていた僕を見て、高橋は「無理に誘ったか」と謝ってきたが、もとはといえば僕が行くと決めたせいだから、「そんなことはない」と返した。

談笑しつつも歩いていくと多くの店が連なる大通りに出た。ちらほらと見え

ていた人影は一気に多くなり、平日の昼間だというのに大勢の人であふれている。

「こんなに人がいるんだな。」

普段あまりこういう場所に来ないせいとか、人の多さに圧倒される。こんな小さな町にこれだけの人がいるなんてと驚かすにはいられなかった。どうやら僕の生活は家と学校との行き来だけになっていたようだ。

「ついたぞ。さて、何をやるうか。」

ぼーっと考えながら高橋の後についていたらすでにゲームセンターに着いていた。高橋はずいぶん乗り気でゲームの機械を物色している。ガチャガチャとした雰囲気にはまいてしまいが、久しぶりに友人と出掛けてきているんだから楽しまなければと気持ちをしリセットした。

そのあとは、彼が選んだゲームを二人でプレイしたり、横で眺めたりした。レーシングゲームや格闘ゲーム、射撃や昔ながらのアーケードゲームなんかもあった。僕はエアホッケーが一番面白いなと思った。もちろん経験がない僕がうまく機械を操作できるわけもなく、随分と苦戦して高橋に笑われることもあったが、意外に楽しむことができた。他に来ている人たちの様子を横目で見るのもまた、楽しさがあった。一人一人に個性というか癖のようなものがあった、同じゲームをしても全く違った内容になっているのが面白かった。……ただきつとまた誘われたら断ってしまうだろうなとは思う。

「あー、楽しかった。」

「そうだな。楽しかった。」

飽きてきたところで、解散しようという流れになっていく。

「いや、なんか付き合わせた感あったからな。ありがとな。」

「そんなことないさ。まあ、始め乗り気でなかったのは確かだけど。誘ってくれてありがとう。いろんな事が出来て楽しかった。」

高橋の言葉にそう返した。

「じゃあ、また明日学校で。」

「ああ、また明日。」

手を振って人ごみに消えていく背を見つめながら、ほっと息を吐いた。

ただひたすらにいいやつだ、と思った。心配りができて、今日のように気軽に遊びに誘ってくる。お世辞にも人付き合いが得意とは言えない、むしろ苦手な部類に入る僕とは反対の性格とっていいだろう。

これもまた、違う世界ってヤツかな。

そう思うと今日、出掛けてきたのはよかったかもしれない。人がたくさんいる場所はあまり好きじゃないけど、それだけ人がいるということはそれだけの景色があるということ。

折角だから、このまま通りを歩いてみようか。ずっとかけているカバンのせいで肩が痛い気もするけど、この機を逃すのはもったいない。

ゲームセンターを出るとまた違った賑やかさがある。人の足音や話し声。一人一人はたいして大きな音を出さないのに大勢いるとこれほど騒がしくなる。飲食店から香ってくる甘い香りが鼻腔を刺激し、客引きの音楽がぼつぼつと響いて独特な雰囲気を作っている。なんというか、こんな田舎にしてはお洒落な通りがあるんだなあ。

華やかな街の外観に感心して歩いていたが、すぐに大通りから外れ、路地裏に來ていた。一步入ればメインストリートとは異なり法外な雰囲気だ。

僕がなぜこんなところに来てしまったか。

それはとても単純で、教室を早く出ることなんかよりよっぽど重要な理由からであった。

「おい、何しているんだ。」

もともとあまり通らない声を張って、疑問符を投げかける。しかしそこに込めた感情が疑問なんかじゃないのは自明だろう。

「なんだ、お前は。」

僕よりも少し年上か若しくは同い年かの体格のいい少年が、あからさまな敵意を僕に向けた。その周りを囲んでいた少年らもまた異物を見るような目をこちらに向けて。彼らはいわゆる不良だろう。

「答えるわけがないでしょう。僕は止めに来ただけだから。」

何を止めるって？この忌まわしい暴力さ。

拳を振り上げる男たちと殴られている友人。何があったかは知らないが、暴行を受けているのは高橋だった。さっき分かれて十数分しかたっていないというのに、随分と厄介な状況に陥っている。友人が窮地に陥っていて助けられないわけにもいかない。

「止めに來たって？笑わせるなよ、お前何様のつもりだよ。」

嘲笑交じりに吐き捨てられた言葉に顔を顰めた。何様はお前だ。

「さあ行こう高橋。」

リーダー格らしき少年の言葉は無視して、壁に追い詰められおびえた様子の高橋の手を無理やり引いて通りに戻ろうとする。たぶん僕も冷静じゃない。普通に考えてこの少年たちを前にそんなことが許されるわけがなかった。

時すでに遅し。少年の一人にガツと肩を掴まれ、思いつきり腹を殴られる。咄嗟に腹筋に力を入れて耐えようとしたが、もともとインドア派な僕の筋肉なんてたかが知れてる。

こらえきれず、息を吐きだしそのまま蹲った。どうやらこれを機に高橋に向い

ていた暴力は僕に移行したようだ。当初の目的は果たしたものの、自分がやられていけば喜ぶわけがない。僕にとっちゃ大損害だ。

抵抗しても助長させるだけだろうと浴びせかけられる罵声も暴力も、ただ受けるしかなかった。

「おいつ、さっさと、逃げる！」

かろうじて言えた言葉はこれくらいか。しかし、それに反応して高橋が路地を駆け出していくのが見えてほんの少しだけ安堵した。

殴られつつも僕は気づいた。高橋が走っていった方向、つまり大通りからこの路地は真つすぐ繋がっている。要するに、ここは大通りから見える。

痛みは記号に変わり、思考のみが回る。

大通りには何人の人がいるのか。その中でこの状況に気が付いている人は何人いるか。ちらりと見えた範囲で、一人、二人、三人……。少なくとも十人はいた。

スルーしている人は何人だろうか。ほらまた気づいた人がいる。でも何もしない。それはそうだ、こんな厄介ごとに首を突っ込みたい奴はいない。でも……。

これだけたくさんの人がいても助けようと動く人はいなくて、自分しか大切にできない人がいて、それどころか他人を傷つける人もいる。高橋が大切な友人であったとしても助けられないことが正しい選択だったというのか。人が苦しむ姿を見て見ぬふりをするのが普通か。

「……もう。嫌だ。」

ポツリと口に出した。そうだ。僕は嫌だった。この社会は集団になると心を失う。人を想うやつはもれなく損をして、自己中心に傍若無人に、人の不幸に我関せずという態度をとれて、自分が楽しいと思えば何でもいいというような、そんな人たちが集まって幸せそうに生きる。

目の前にいる少年たちこそが、そういう人たちの権化であるように思えた。

脳みそが沸騰しているような感覚を覚えて、体中に得体のしれない熱い感情が沸き起こった。心地よい熱ではなくて、今すぐ吐き出してしまいたい、黒々とした闇夜を這う火山流のような不気味な熱だった。

僕は蹲っていた体制からそのまま上体をひねりながら、目の前の少年に向かって腕を振るった。

気が付くと夕焼けすらも地平線に消えて、煌々と望月が路地を照らした。

僕を取り囲んでいたはずの少年たちの姿はなく、彼らは体中に感じる痛みと、擦れて赤くなつた拳によって実感できるのみの存在になっていた。

何時になつたのだろうか。じめじめした路地からのろのろと出て行くが、大通りには一切の人影は無かつた。

その場に座り込んで膝を抱えた。路地に入るとき入り口に置いていたカバンはなくなっていて、誰かに持ち去られたのだろうか。

困ってしまうな、あれには昨日借りた本だつて入っていたのに。見つからなかったら竹内さんになんて言えばいいだろうか。

頭上に目を向ければ相変わらず丸い月がその姿を見せつけてきた。

ほろりと頬を雫が伝った。自分が泣いているのだと認識するのに対し時間はかからなかった。

この感情は何だろう。苦しいのか、悲しいのか、辛いのか、虚しいのか。僕は間違っていたのだろうか。やっぱり通り過ぎて行ったあの人たちが正しかったのだろうか。

結局、僕だつて人を殴るような人間だった。まだ手に感触は残っている。それだけでこの身が忌まわしいもののように感じられる。自分のために他人を傷つけて、それがさも当たり前のような、あいつらと同じことをした。自分が嫌いだった人間に自ら成り果てたのだ。それでも、自分は悪くないと言い張ってしまう気持ちだった。

人殺しと一般人の差とは何なのか。僕はそこに差なんてないと思う。

罪を犯すか潔白に生きるかは紙一重だ。ある日「うっかりミス」で人を殺めるかもしれないだろう。そうして、今まで悪だと思っていたものに自分になった時、自分を悪だと断じることができるか。大きすぎる例えだが、きっとそういうことだ。

唇を噛みしめて嗚咽をこらえる。

この感情に名前を付けるなら、悔しさだ。

僕は今日大事にしていた大切な何かを失った気がする。求めた何かを手に入れた、その代わりに願っていた夢を捨て去った。そして、それを失うことは必然だったのだと、納得した。たぶん周りの人たちはもっと早くにそれを捨てていたんだろう。でも、喪失感と自分が変容したような感覚に馴染むことはできない。

立ち上がって歩き出しはしたが家に帰る道を忘れてしまったかのように、当てなく進んだ。街灯に沿って街を歩くが、殴られて悲鳴を上げている体は、数歩あるつては立ち止まるのを繰り返していた。

僕はどこに行けばいいのだろうか。もうずっと抜け殻になったみたいに歩き続けていたかった。

足が止まった時、ぼんやり滲んだ視界を閉ざした。そのあとは知らないっていいのは無責任かもしれない。

「あら、起きた。」

「あ、ほんと？ 良かったあ。」

少し遠くから聞こえる声が二つあった。

まずここはどこなのかと目を瞬かせ周囲を見渡した。すると視界の端に菜の花色の布が移る。

「竹内さん。」

呟くと彼女はにこりと笑った。

「おはよう、山野くん。」

それだけ言ってそのまま静かに机に向かった。再び周囲を見渡すと、部屋の奥からメダカさんが心配そうにこちらを見ていた。

ここはたぶんカウンターの奥にある司書室だ。僕がいるソファと、仕事用のデスク、小さいテーブルと椅子が数脚あるくらいで、広いとも言えない部屋。そこに漂う空気はひどく落ちていて口を開くのは野暮な気がする。その場の皆がその雰囲気沈むことを望んでいるように思えた。

目が覚めてから一時間経ったのか経っていないのか、それ以上に時計は進んでいるかもしれないし、もしかしたら十分も経っていないかもしれない。緩やかな空気の中では時間の感覚が麻痺していた。それが心地よくて空虚さが少しずつ埋まっていくようだった。

「ねえ、山野くん。」

そう思うのもつかの間、竹内さんの凜とした声が響いた。とうとう時間の淀みから引きずり出されてしまった僕は、大急ぎで居住まいを正して彼女に向き直った。

「はい、何でしょうか。」

少々堅苦しい言葉が飛び出したのは、これまでのことに対する罪悪感からであり、まだ礼のひとつも言っていないのに気付いたからだ。

「もう体は大丈夫？」

「は、はい。」

「じゃあさ、ちよつとふたりでこの本、棚に戻ってきてもらえるかな？」

「了解です。じゃあ行こうか山野くん。」

投げかけられた質問にメダカさんが返事をして、僕らは両手に本を抱えて歩き出す。深く礼をして司書室から出た。竹内さんは役割を果たしたというような満足げな顔で僕らを見送った。

「実は本戻すときって、適当に入れ直しているだけなんだよ。」

告げられた事実に衝撃が隠せない。今までの憧れみたいな気分が吹っ飛んだようだった。

「そんな驚いた？」

メダカさんは人のよさそうな顔をくしゃりと歪めた。

「陽菜さんはつまらない事とか、カッコのつかないことは言わないからね。」
「そうですか。」

それにしても拍子抜けである。

「そういえば、いったい何があったの？ 倒れていたけど。」

ついに訊かれてしまったと、思わず目を伏せた。世間話に混ぜ込むようにふわりと訊いてくるのは一種の気遣いのように思えた。

「運んでくれたのってメダカさんですか？」

「うん、そうだよ。丁度通りかかったから。」

「それは、ありがとうございます。」

深く礼をすれば、メダカさんは大したことはないと言った。

「実は、喧嘩をしてみましたんです。殴ったり蹴ったり。」

僕が白状すると、

「殴ったり蹴ったりだった？ それは大変だ。」

メダカさんは本を棚に並べながらもオーバーにリアクションをとる。

「孝くんも喧嘩なんてするんだねえ。」

「仕方なく、ですよ。やり返してしまっただけ。」

少し目じりが熱くなったが、これ以上の迷惑はかけまいと眉を寄せた。事の成り行きを喋れば、まだあれが不可抗力で自分は断じて悪くないと責を放棄するような気持でいるのが情けなく思う。

「僕もね、学生の時はたくさん喧嘩してたんだよ。」

ふいにメダカさんは語りだした。

「そんな風には見えないです。」

率直に思ったことを言うと、苦笑いをして続けた。

「うーん。きつと極端だったんだ。感性も考え方も。」

メダカさんはぼつりぼつりと自分の学生時代について教えてくれた。

「今でこそ意味のないことだったとわかってはいるけど、あの頃は暴力や権力が全部だっと思ってしまっていたんだ。人のことなんて考えていなかったし、自分が楽しければいいと思っていた。」

どこか恥ずかしそうに話すメダカさんの昔話は今の彼とは正反対な人物像を描いていた。そんな彼がなぜ変わったのか、とても気になった。

「そんな時に、僕はメダカに出会ったんだよ。」

「僕が高二になったくらいかな。地元で小さなお祭りがあったね。荒らしてやろう！と思っ行って行ったことがあるんだ。」

懐かしそうに目を細めて言った。

「小さな鉢にメダカを入れて売っている人がいたんだ。それを一目見たら、思わず買ってしまって、もう喧嘩どころじゃなくなった。そのまま帰って、メダカを

育てるのに必死になって、気が付いたらそれを仕事にしてたよ。」

一目ぼれだね。」と笑った。

「孝くんもそう気に病むことはないと思うよ。」

「そういつて大きな手が僕の頭を撫でた。」

「どうしようもない時もある。ちゃんと反省できているなら十分さ。」

「そんなものですかね。」

「ああ、そんなもんだよ。」

既に手元に本は無く、僕は前に見た木箱の前に来ていた。

よいしょ、とその蓋をとるメダカさんの顔は前に見たわくわくしたものは違い、何か愛しむような、そんな視線だった。

透明な水面に三匹の小さなメダカがゆらゆらと泳いでいる。

みな底に敷かれた砂利石に植え付けられた水草が水になびいている。背をスツと通る青いラインが素朴な光を湛え、ノスタルジックで静謐な空気が漂った。

「これはひとつ目の鉢、ですか。」

「そうだよ、かわいいだろう。もういなくなってしまったけどね。」

青い三匹のメダカを指して言った。

「これはみゆきっていう品種のメダカなんだ。とても有名な品種で青白い背が特徴なんだけど。」

よく見てみて、と促されゆらゆらと漂う三匹を見つめた。

「それぞれラインの長さとか色味が違うだろう。」

「本当だ。違いますね。」

「でしょう？これが僕がメダカを好きになった理由なんだ。」

メダカさんはおもむろに近くの棚からメダカの辞典をとり、開いた。彼に倣ってのぞき込み、僕は驚いた。

「こんなにたくさん種類の種類があるんですね。」

「うん、メダカは品種改良もされているから五百種近くいるといわれているんだ。それぞれが個性的でいいところも悪いところもあって、大好きなんだ。さっきみたいに個体差もあるし、性格もそれぞれ違ってね。」

そう語るメダカさんはとても楽しそうだった。

「この箱はこの三匹が死んでしまったときに見つけたものなんだ。これを見る」と昔のことをよく思い出せる。いいことも、悪いことも。」

僕はこの可憐な水槽に見入った。ちいさな世界に詰まった思いの鱗片を見た気がした。

「じゃあ、僕はもう帰るね？家族でレストランに行く約束をしているんだ。」

しばらく眺めているとメダカさんは立ち去ろうとした。

「えっ、メダカさん結婚してるんですか。」

思わずそうきいてしまった。だってメダカに人生を捧げたような人だと思っ
ていたのだ。

「してるよ。大切なものは一つとは限らないのさ。」
そう言って去っていった。

ぽつんと取り残された僕は、自分の宝箱を探して歩いた。

前回探したときは見つけることができなかったが、今日は見つかるだろうと
いう根源のわからない自信が漲っていた。

少し歩けば僕の景色が見えてくる。その奥の方へ進む。僕の性格上おそらく、
すぐに見つかるころにはない。大切なものは大事に秘密に隠しておきたかっ
た。

「あ、あった！」

少し歩き疲れてきたとき、本棚に四方を囲まれ、ぽかんと空いた空洞を見つけ
た。

一歩一歩入っていくと中心に曇った小さなガラスケースを見つけた。恐る恐
る近づくと、そのケースには小さな鍵穴が見えた。

鍵がないと開けられないのかと、一瞬落ち込みかけたがその心配はいらない。
きつと、鍵はこの僕だ。

そつと触れるとカチリと音がして、期待に胸が高鳴った。

僕の大切なものっていったい何だろう？ この箱が教えてくれると、逸る気持
ちを抑え、静かに箱を開けた。

ふわり。

爽やかな風が吹いた。

色に例えをとるなら白、そして消えそうなほど透き通った青。

頬をなぞる透明な風。それだけが溢れ出した。

止まった時すらも動かせそうなほど、澄んだ風を感じながら僕は中を覗き込
んだ。半透明なケースの中には何もなかった。透けて地面が見えるはずだが、そ
れすらもない。ただ光に満ちているように、むしろ暗闇であるかのように、何も
ない。

風に包まれながらある詩の一節を思い出していた。

諸君はこの颯爽たる

諸君の未来圏から吹いて来る

透明な清潔な風を感じないのか

たしか、宮沢賢治の詩だったと思う。

今まさにそれを感じているようだった。この風は未来につながる風であると、そう思った。

竹内さんに作業が終わったと報告し、家に帰ったのが夜中の一時を過ぎたころだった。

真夜中であるにも関わらず、電気がついていて、両親は僕を迎え入れてくれた。二人に一時間ほどの説教を受けたが、それが愛ゆえであるとわかるから少し嬉しいとすら思った。

丸々一日帰らなかった親不孝振りには、僕の「孝」という名の由来に恥じるものだが、たつたの一日でも僕はいろいろなことを経験し、ちよつとだけ成長できた気がするから無駄ではなかったと信じたい。その成長が良い方向だったかは、まだわからないけれど。僕の日常の延長線上には突飛な出来事がいくらかもある。当然平日だったわけで、僕は学校を一日ずる休みしてしまったことになる。今まで皆勤だったから少し悔しいと思った。

翌日学校に行くと、すぐに高橋がやってきて、僕に謝った。カバンの行方はついにわかることはなかったが、大切なものは本しかなかったし、さらに言えばその本は図書館に戻って来ていたから問題はない。不思議なところしかない図書館である。

僕はあの不思議な図書館に思いを巡らせる。

あのケースに入っていたものが何なのかは、数日たった今でもよくわかっていない。あの日以降見つけたことは無いし、探そうとも思わなかった。

なぜあの日、僕の世界にあの宝箱が現れたのか。それはきっと僕が僕自身の現状を受け入れたからだ。宝箱から流れ出したのは未来だった。見つからなかったのは僕が未来を拒絶してしまっていたからだだろう。

いろんなものを無くして少しのことを諦めて、それで成長できたならいいのかもしれない。どこか釈然としないところもあるけれど、あの爽やかな風により僕は実感を持って押し出された。

もう潔癖な正義に掴まり続けることはできない。自分の中にある心を手繰り寄せて歩いて行かなくてはならないのだろう。

人はそれぞれ持つ世界が違う。それを知っていても受け入れなかった僕。自分を受け入れる事もできずに腐っているしかなかった。

少しずつ変わっていくのは周りだけじゃなくて、僕も一緒に変わらなくちゃいけないと知った。それぞれがそれぞれの世界を作る。大人にならなきゃいけない僕は、青臭いままでも、進む。今日も明日もあの図書館に向かうのだ。

新しい風を吹かせるのはいつだってあの場所だ。